

## 序文

一億五千年前のジュラ紀、或いはそれよりも更に古い大昔、中国北西部の崑崙山から空を蔽うようにして吹き寄せて来た黄塵は、ずうっとずうっと今日までも吹き寄せられ続け、蓄積され現在の西北黄土高原の地形が作り上げられました。黄土高原の黄土層は最も厚いところで500 m余りにもなり、世界でも唯一無二のものとも言われています。この本の中で語られる陝北黄土高原はその（中国）西北黄土高原のごく一部分に当たります。

水は生命の源です。乾燥した大地は水を得て潤い、地力を蓄え、ひっそりと静まり返った不毛の荒野は水を得て生命が満ちるようになります。と同時に、黄土の大地は雨水に洗われ、現地で‘毛沟’（máo gōu）（\* 毛は小さく、細いの意）と俗称される、数え切れない溝をも出現させます。黄土高原を縦横無尽に刻む‘毛沟’は、一億年の風雨に浸食されて、更に深くえぐられ、引き伸ばされ、黄土高原をばらばらに分割して行きました。大きな‘毛沟’では今は河となり、河の両岸は‘川’（chuān）と呼ばれる平地になり、人々の生活に適したよい場所にもなっています。侵食されずに、高く小山のように盛り上がったところは‘峁’（mǎo）と呼ばれ、‘峁’がもっと大きくなれば‘梁’（liáng）となり、更に広がりがあるところは‘塬’（yuán）と呼ぶようになります。そして川と塬梁の間にあるまるで刀で削り取ったようなごつごつとした崖面を‘沟壑’（gōuhè）と呼んでいます。有る人が黄土高原をこんな風に描写しました。「梁峁起伏，沟壑纵横，无雨干旱满天尘土，逢雨遭殃遍地泥浆」（梁峁が打ち続き、沟壑が縦横に走り、雨が降らない日照りの大地は黄砂が降り注ぎ、雨が降ればどこもかしこも泥水だらけ）。

この地に雨水の侵食でできた最も深く、最も長い‘溝’があり、現地の人の呼び名はいろいろです。或る人は‘伏羲河’（fú yì hé）と呼び、又、或る人は‘苏亚河’（sū yà hé）と呼び、‘城畔河’（chéng pàn hé）と呼ぶ人もあります。人々はその流れが上流から流れて来るとは知っていても、それがどのあたりからなのかははっきりとは知りませんし、下流に向って流れて行くことは知っていますが、どこに向って流れてゆくのかは知りません。人々は先祖代々、年々月々、慈潤という恵みを受けながらずうっとその流れと共に生活して来ました。しかし、各地の‘毛沟’や‘小溪’が集めてくる泥水をどんどん受け入れた結果、時には怒りを発することもあるので用心しなければなりません。‘毛沟’は常に大量の黄砂を流し込んだ泥水を誰はばかりことなく‘大沟’に流し込み、‘大沟’の水を黄色く染め、後世の人々は彼を「黄河」という名で呼ぶようになりました。

歲月は過ぎ去り、河は更に深くなりました。黄河の両側は峡谷のように、切り立つ厳しい姿になりました。河は休むことなく流れ、溪谷の上部をまだらな緑色に染め、

まばらに木が生えるようになりました。東方に日が昇ればゆらゆらと炊煙が立ちのぼり、西の山に日が落ちればゆったりと歩く人影が見えるようになりました。人類がいつ頃から黄土と連れ合いになり、黄河に相依り、世代世代、収穫を重ね、衰えることなく生きてきたのでしょうか？

‘山’で、緑の斑点のように樹木が生えている辺りは、人々が生活しているところでそこには村があります。村には名前を付けなければならず、例えば“一斗谷”村のように、生活と密接に関わる名前が選ばれます。家に一斗谷（\*谷は穀類の総称）があれば、生活に愁いはありません。この一斗谷村の中央に一本の古いエンジュの老木があります。風霜に打たれ、酷暑に耐えた長い歳月を刻み込み、毎朝誰よりも早く日の出を迎え、一番最後に落日を見送っています。この樹は村人が生まれ落ち、成長し、仕事をし、老いてこの世を去るまでの波乱の一生見えています。生きとし生けるもの、老人も、老婆も、若者も、娘や子どもたちも老エンジュの許で集っています。子どもたちの中には男の子もいれば女の子もいます。男の子は家の支えであり、女の子もまた父母の掌中の玉です。「子どもは頭の上に3升の雑穀を乗せている」と言われていますが、それは子どもは食料を持参して生まれ出るのであり、この世に生まれたからには生きる権利を持っているということです。ですからこの地の人はそれぞれの子どもは皆先祖の生まれ代わりと見なし大事に育てます。たとえその子が知恵遅れの子どもであっても食事を与え育てなければなりません。

しかしながら、この痩せ土の村に生れ落ちるということは‘腹いっぱい食べる’という苦渋に満ちた重荷を肩にすることでもあるのです。体の構造から男の子は力ある労働力ですし、先祖を祭り続ける大切な存在です。確かに女の子も又子々孫々と世代を繋ぐに欠かせない存在であり、父母への親孝行の心は勝っています。しかし、いずれにせよ人は老いて行くものであり、年老いけば身近に息子がどうしても必要です。さもないと老人たちの生活は困難なものになるでしょう。遠くの村に嫁した娘は、遠くの水が渴きを癒してはくれないようなものです。国の政府からどんな老人福祉も生活の保障も当てにすることができない人々の現在の最大の問題といえるでしょう。「子どもを育て老後に備える」というのは人々の固い信念であり、自分自身を守る方法です。ですから愛情の天秤は男の子の方に傾きがちで、ひとたび家が窮迫すれば、真っ先に学校を辞めるのは必ず女の子です。これが現実なのです。

20年前初めて私が陝北の地に足を踏み入れたとき、新鮮な、何か好奇心をそそられる感じを受けました、が、一方心とがめるような感情も味わいました。道端の壊れた窑洞（yáodòng：\*山の斜面などに掘られた横穴式住居）の傍らに立った、色白のおとなしい女の子が決まり悪そうに私を見していました。聞き分けよく身体を私に向けて写真を撮らせてくれましたが、私は写真を撮り終わると、その子のもの問いたげな気持ちや、何か願うような気持ちを背に立ち去ってしまいました。その後、

私はこの地を10回以上訪れ、又2年の歳月をこの地で過ごし、同様な何か求めているような眼差しに何回も出会いました…。

痩せた耕地と生活の苦難は形と陰のような関係で切り離せません。しかし、この地の子どもたちから天真爛漫で純朴な天性を奪い取るものではありません。陽光の下の子どもたちの顔には貧困がもたらす怨みや卑下の表情を見ることはなく、彼らの元気で純真な笑い顔はこの世界に永遠に希望をもたらすものです。

このような黄土高原ですが、経済と文化の深刻な遅れという厳しい現実があります。粗末の教室の中は薄暗い、風通しは悪い、先生は足りない、子どもたちが課外で読む本や文字を書く紙は不足、勉学の補助施設は何もない…、彼らが受ける教育の質も量も総体的にこの地以外の同年齢子どもたちに比べて1年乃至2年の遅れがあります。進学試験に失敗すれば、故里に戻り、彼らの父母が歩んだのと同じように、畑に出て作物を育て、先祖代々の血筋を絶やさないようにし、郷土を守り、そして最後は静かに黄土の土となって戻ってゆく…。

この本の何十人かの陝北の女の子は皆さんに彼女たちの真実の心の中の世界、生活、勉学の環境、彼女たちの周りで起こった事柄、そして彼女たちの夢を告げています。